



日本水ロケット全国大会にて(2010年)
岩本さん(写真左)

最初は中2の時。スペースシャトルが打ち上がるのを見て感動しました。日本で人を宇宙に打ち上げたい、そのためには国を頼るのではなく、会社を作るべきだと思いました。会社を作るなら理系じゃない、文系だ。結果、大学では経済学部を選択しました。大学に入った後は、宇宙を目指すという意識が薄くなり登山に力を入れ、3年生の時にヒマラヤの6500mの山、メラピークにも登りました。その山頂に立ち、次の目標を考えたとき、そばにそびえるエベレストを見ながら、高い山に登っていくのもいいが、どうせなら山よりも高い宇宙まで行きたい。宇宙を目指してビジネスをやろうと思っていたことが強くよみがえりました。

― 宇宙に目を向けたのは？

― 最初は中2の時。スペースシャトルが打ち上がるのを見て感動しました。日本で人を宇宙に打ち上げたい、そのためには国を頼るのではなく、会社を作るべきだと思いました。会社を作るなら理系じゃない、文系だ。結果、大学では経済学部を選択しました。大学に入った後は、宇宙を目指すという意識が薄くなり登山に力を入れ、3年生の時にヒマラヤの6500mの山、メラピークにも登りました。その山頂に立ち、次の目標を考えたとき、そばにそびえるエベレストを見ながら、高い山に登っていくのもいいが、どうせなら山よりも高い宇宙まで行きたい。宇宙を目指してビジネスをやろうと思っていたことが強くよみがえりました。

― 子供たちの思い出は他にも？

YACで働く前にパリ駐在員だった時期があり、パリの日本人学校で水ロケット大会をやりました。イギリスに新しく科学館ができた時にも、パリから出向いて水ロケットのイベントをやってお手伝いしました。水ロケットって日本発祥じゃないですか。日本の電力会社が、山岳地帯で沢向こうの尾根に架線をつなこうとした時に、水ロケットを飛ばして尾根から尾根へ届けたのが最初だつて言われて。だから「日本発」なんです。それで、ザビエルがキリスト教を伝える時みたいに、日本の水ロケットを伝えてきました。(笑)パリ駐在から帰って、産学官連携部を経てYACに行ったんですね。YACでも水ロケットが好きで、全国大会をやろうって言い出して、開きました、愛知万博の跡地で。水ロケットって、3気圧ぐらいだと、60mか80mぐらいしか飛ばない。でも7気圧とか、7.5気圧ぐらいかけると130mぐらい飛ぶんですよ。

それは街中ではできないんで、子供たちに思いっきり飛ばさせてやりたいくて全国大会やって。YACの各地の分団の子たちも集まれるね、って言って、各地で予選やって。だけど最後にルールを決める時に、7気圧までやったらペットボトルが破裂するかもしれない、危ないからやめましょう、と先生方に言われて。「俺も思いっきり飛ばしたくてここに来たのにー」とか言いつつ、飛ばさせてもらえなかったっていう残念な思いがあります。(笑)



YAC 種子島スペースキャンプ(2023年)

― 今年8月にもまたYACのサマーキャンプに参加されましたね。

― 久しぶりに子供たちと触れ合えてやっぱり良かったですね。登山やってたんで、今回「山と宇宙」っていうタイトルでお話して。山と宇宙はすごく似てるんですよね。宇宙食って、登山で使うような食事と同じで軽いし。保存が効く。

子供たちに話したのは例えば、登山でザックを背負うときに物をうまくパッキングしないとバランスが崩れるじゃないですか。軽量化しないと疲れるし。軽くしてバランス良くして、何が必要かって選り抜いて入れる。それって人工衛星と全く同じなんです。もちろん宇宙飛行士のチームワークみたいなところも似てるっていう話をして。

子供たちの中には宇宙飛行士になりたい子も何人かいたけど、サマーキャンプを通してそういうさまざまな経験をするのはやっぱりいいなと思いました。

― 若い世代に同調圧力が強いような話も聞きます。

― 若い世代に同調圧力が強いような話も聞きます。

― 若い世代に同調圧力が強いような話も聞きます。

― 変わり者だったんですか、そういう感じないですね。何か、全てを包み込むオーラが！(笑)

それはちょっと丸くなってるのか、そういうことかなと…(笑)

― 若い世代に同調圧力が強いような話も聞きます。

― インタビューにご協力いただき、ありがとうございました。

― インタビューにご協力いただき、ありがとうございました。

― インタビューにご協力いただき、ありがとうございました。



JAXA 東京事務所(2023年)

― 宇宙関連の企業も分野も増えてきましたが、それが繋がらないと大きくなっていきませんか、岩本さんのようなお仕事をやる人がすごく必要ですね。

― 宇宙関連の企業も分野も増えてきましたが、それが繋がらないと大きくなっていきませんか、岩本さんのようなお仕事をやる人がすごく必要ですね。

― 宇宙関連の企業も分野も増えてきましたが、それが繋がらないと大きくなっていきませんか、岩本さんのようなお仕事をやる人がすごく必要ですね。

― インタビューにご協力いただき、ありがとうございました。



メラピーク(ネパール6,476m)山頂(1990年)
岩本さん(写真中央)

― 就職時は商社に行くかNASDA(JAXAの前身)に行くか悩みましたが、20年後の自分を思い描いた時に、商社では必ず宇宙に携われるか分からないので、NASDAに行つて宇宙のことをやっている方が宇宙ビジネスができる可能性が高いかと思いNASDAにしました。正直、文系出身者に何ができるかわかりませんでした。将来の自分が後悔しない、ということを大事にしました。

― 岩本さんが推し進められたJSPARC(JAXA宇宙イノベーションナートナード)もその延長に？

2018年、ワシントン駐在から日本に戻った後、新事業促進部でJSPARCに着手しました。宇宙ビジネスの領域でチャレンジしてみようと。ちなみに、人がすぐにOKを出すようなもの、「いい」と言うようなものより、「そんなのは絶対無理、ありえない」と言われたプロジェクトの方が実現した後の影響力も大きく、進める価値があると考えています。

10年以上前例ですが「あいのり小型衛星」の制度を立ち上げました。H2Aロケットに大学や民間企業の衛星をタダで載せて打ち上げるプロジェクトです。

当初JAXA内では大変な反対を受けました。「なんでタダで打ち上げてあげなきゃいけないんだ」といった感じで。しかしこれをやれば世の中が爆発的に変わるから」との信念で推し進めました。



引越し前のYAC事務所で勤務する岩本さん

― 宇宙好きが集まっています。各地の分団で月1回ぐらい集まります。YACのスペースキャンプなどを見ると、全国から集まった宇宙好きの子供たちが、なかなか学校ではできない宇宙の話を、そういう所に来るとみんな盛り上がり、ずっと話して相手が見つかった感じで話をしたりして、すごくいいなと思うんです。今はやっと宇宙がちょっとずつ市民権を得てますが、当時はまだまだマニアックな世界でしたからね。

― YACではどのようなお仕事を？

JAXAからは「経営をちゃんと学んで来い」と言われてYACに出向しまして、組織の経営・運営が大きな仕事でした。新しい分団の立ち上げもして、自分の子供たちも団員として入れました。

YACは宇宙のポロイスカウトみたいな感じで、宇宙好きが集まっています。各地の分団で月1回ぐらい集まります。YACのスペースキャンプなどを見ると、全国から集まった宇宙好きの子供たちが、なかなか学校ではできない宇宙の話を、そういう所に来るとみんな盛り上がり、ずっと話して相手が見つかった感じで話をしたりして、すごくいいなと思うんです。今はやっと宇宙がちょっとずつ市民権を得てますが、当時はまだまだマニアックな世界でしたからね。

― JAXAの敷居が低くなつて企業の参入が増えたと感じますが、そういう陰のご努力があったのですね。

― 大学や企業、地域でもできると、東大阪のおつちゃんたちはじめ多くの方が宇宙開発に集まってくれました。ありがたかったです。そうしたところへ、YAC(日本宇宙少年団)の運営を手伝ってくれないかと、的川泰宣先生から相談がありました。相模原で深夜2時3時まで飲み交わして話し合いました。

― JAXAの敷居が低くなつて企業の参入が増えたと感じますが、そういう陰のご努力があったのですね。

― JAXAの敷居が低くなつて企業の参入が増えたと感じますが、そういう陰のご努力があったのですね。

― JAXAの敷居が低くなつて企業の参入が増えたと感じますが、そういう陰のご努力があったのですね。

― JAXAの敷居が低くなつて企業の参入が増えたと感じますが、そういう陰のご努力があったのですね。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。



趣味は多彩 チェロ演奏も(2011年)

『宇宙を身近に』

会員 岩本 裕之さん

インタビュー 理事 菊地 涼子

プロフィール
岩本 裕之(いわもとひろゆき)さん
JAXA 人事部長
SLA(一般社団法人 宇宙旅客輸送推進協議会)理事
SORA TOURISM(一般社団法人 宇宙ツーリズム推進競技会)理事
YAC(公益財団法人 日本宇宙少年団)アドバイザー

それまでは、ロケットで打ち上げることが決まってから衛星を作っていました。ロケットに合わせて、この隙間に50kgとか100kgとかの衛星を載せられるから、その重さに合った衛星を募集する、と。募集に通った人がその設計に合わせて衛星を作り始めるというやり方でした。

これではみんな衛星を作らない。先に衛星を作つて、打ち上げのウェイトイングリストに登録してもらい、「ロケットに隙間がある時に載せて飛ばせるよ」と言えばみんな衛星を作る。それで大学、地方、中小企業が衛星を作り始めてくれた。

実際にこの制度を発表したら多くの大学がキューブサットを作り始め、メディアでも取り上げていただいて世の中の風潮が変わり、JAXAもこの制度を推進しようという雰囲気になりました。この制度が大学や民間企業が衛星を作る大きな転機になったと考えています。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。

― KU-MAも最初から会員になっていたかったです。